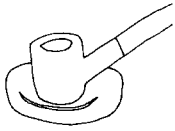
道草

夏目漱石

道草



夏目漱石

ほるぷ出版

市古貞次・小田切進■編　日本の文学28

道草

著　者　夏目漱石
責任編集　市古貞次（古典編）
　　小田切進（近代編）
発行日　昭和五十九年八月一日　初版第一刷発行
発行所　株式会社　ほるぷ出版
　　代表　中森蒔人
　　東京都新宿区新宿二―十九―十三
　　電話（〇三）三五四―七〇三一（代）
総発売元　株式会社　ほるぷ
　　東京都新宿区新宿二―十九―十三
　　電話（〇三）三五六―六二一一（代）
製　作　東京連合印刷株式会社
印刷　図書印刷株式会社

目次

道草

注　456

主人公健三と作者漱石　桶谷秀昭　465

道

草

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一

健三が遠い所から帰って来て駒込の奥に世帯を持ったのは東京を出てから何年目になるだろう。彼は故郷の土を踏む珍しさのうちに一種の淋し味さえ感じた。

彼の身体には新しく後に見捨てた遠い国の臭がまだ付着していた。彼はそれを忌んだ。一日も早く其臭を振い落さなければならないと思った。そうして其臭のうちに潜んでいる彼の誇りと満足には却って気が付かなかった。

彼は斯うした気分を有った人に有勝な落付のない態度で、千駄木から追分へ

出る通りを日に二遍ずつ規則のように往来した。

ある日小雨が降った。其時彼は外套も雨具も着けずに、たゞ傘を差した丈で、何時もの通りを本郷の方へ例刻に歩いて行った。すると車屋の少しさきで思い懸けない人にはたりと出会った。其人は根津権現の裏門の坂を上って、彼と反対に北へ向いて歩いて来たものと見えて、健三が行手を何気なく眺めた時、十間位先から既に彼の視線に入ったのである。そうして思わず彼の眼をわきへ外させたのである。

彼は知らん顔をして其人の傍を通り抜けようとした。けれども彼にはもう一遍此男の眼鼻立を確める必要があった。それで御互が二三間の距離に近づいた頃又眸を其人の方角に向けた。すると先方ではもう疾くに彼の姿を凝と見詰めていた。

往来は静であった。二人の間にはたゞ細い雨の糸が絶間なく落ちている丈な

ので、御互が御互の顔を認めるには何の困難もなかった。健三はすぐ眼をそらして又真正面を向いた儘歩き出した。けれども相手は道端に立ち留まったなり、少しも足を運ぶ気色なく、じっと彼の通り過ぎるのを見送っていた。健三は其男の顔が彼の歩調につれて、少しずつ動いて廻るのに気が着いた位であった。

彼は此男に何年会わなかったろう。彼が此男と縁を切ったのは、彼がまだ二十歳になるかならない昔の事であった。それから今日迄に十五六年の月日が経っているが、その間彼等はついぞ一度も顔を合せた事がなかったのである。

彼の位地も境遇もその時分から見ると丸で変っていた。黒い髭を生やして山高帽を被った今の姿と坊主頭の昔の面影とを比べて見ると、自分でさえ隔世の感が起らないとも限らなかった。然しそれにしては相手の方があまりに変らな過ぎた。彼は何う勘定しても六十五六であるべき筈の其人の髪の毛が、何故今でも元の通り黒いのだろうと思って、心のうちで怪しんだ。帽子なしで外出す

る昔ながらの癖を今でも押通している其人の特色も、彼には異な気分を与える媒介となった。

彼は固より其人に出会う事を好まなかった。万一出会っても其人が自分より立派な装服でもしていて呉れゝば好いと思っていた。然し今目前見た其人は、あまり裕福な境遇に居るとは誰が見ても決して思えなかった。帽子を被らないのは当人の自由としても、羽織なり着物なりに就いて判断したところ、何うしても中流以下の活計を営んでいる町家の年寄としか受取れなかった。彼は其人の差していた洋傘が、重そうな毛繻子であった事に迄気が付いていた。

其日彼は家へ帰っても途中で会った男の事を忘れ得なかった。折々は道端へ立ち止まって凝と彼を見送っていた其人の眼付に悩まされた。然し細君には何も打ち明けなかった。機嫌のよくない時は、いくら話したい事があっても、細君に話さないのが彼の癖であった。細君も黙っている夫に対しては、用事の外

決して口を利かない女であった。

二

次の日健三は又同じ時刻に同じ所を通った。其次の日も通った。けれども帽子を被らない男はもう何処からも出て来なかった。彼は器械のように又義務のように何時もの道を往ったり来たりした。

斯うした無事の日が五日続いた後、六日目の朝になって帽子を被らない男は突然又根津権現の坂の蔭から現われて健三を脅した。それが此前と略同じ場所で、時間も殆ど此前と違わなかった。

其時健三は相手の自分に近付くのを意識しつゝ、何時もの通り器械のように又義務のように歩こうとした。けれども先方の態度は正反対であった。何人をも不安にしなければ已まない程な注意を双眼に集めて彼を凝視した。隙さえあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

れば彼に近付こうとする其人の心が曇よりした眸のうちにあり〳〵と読まれた。出来る丈容赦なく其傍を通り抜けた健三の胸には変な予覚が起った。

『とても是丈では済むまい』

然し其日家へ帰った時も、彼はついに帽子を被らない男の事を細君に話さずにしまった。

彼と細君と結婚したのは今から七八年前で、もう其時分には此男との関係がとくの昔に切れていたし、其上結婚地が故郷の東京でなかったので、細君の方ではじかにその人を知る筈がなかった。然し噂として丈なら或は健三自身の口から既に話していたかも知れず、又彼の親類のものから聞いて知っていないとも限らなかった。それは何れにしても健三にとって問題にはならなかった。

たゞ此事件に関して今でも時々彼の胸に浮んでくる結婚後の事実が一つあった。五六年前彼がまだ地方にいる頃、ある日女文字で書いた厚い封書が突然彼

の勤め先の机の上へ置かれた。其時彼は変な顔をして其手紙を読んだ。然しいくら読んでも〳〵読み切れなかった。半紙二十枚ばかりへ隙間なく細字で書いたものの、五分の一ほど眼を通した後、彼はついにそれを細君の手に渡してしまった。

其時の彼には自分宛でこんな長い手紙をかいた女の素性を細君に説明する必要があった。それから其女に関聯して、是非とも此帽子を被らない男を引合に出す必要もあった。健三はそうした必要にせまられた過去の自分を記憶している。然し機嫌買な彼がどの位綿密な程度で細君に説明してやったか、その点になると、彼はもう忘れていた。細君は女の事だからまだ判然覚えているだろうが、今の彼にはそんな事を改めて彼女に問い訊して見る気も起らなかった。彼は此長い手紙を書いた女と、此帽子を被らない男とを一所に並べて考えるのが大嫌いだった。それは彼の不幸な過去を遠くから呼び起す媒介となるからであ

った。

幸い彼の目下の状態はそんな事に屈託している余裕を彼に与えなかった。彼は家へ帰って衣服を着換えると、すぐ自分の書斎へ這入った。彼は始終その六畳敷の狭い畳の上に自分のする事が山のように積んであるような気持でいるのである。けれども実際から云うと、仕事をするよりも、しなければならないという刺戟の方が、遙に強く彼を支配していた。自然彼はいら〳〵しなければならなかった。

彼が遠い所から持って来た書物の箱を此六畳の中で開けた時、彼は山のような洋書の裡に胡座をかいて、一週間も二週間も暮らしていた。そうして何でも手に触れるものを片端から取り上げては二三頁ずつ読んだ。それがため肝心の書斎の整理は何時迄経っても片付かなかった。しまいには此体たらくを見るに見かねた或友人が来て、順序にも冊数にも頓着なく、ある丈の書物をさっさと

書棚の上に並べてしまった。彼を知っている多数の人は彼を神経衰弱だと評した。彼自身はそれを自分の性質だと信じていた。

三

健三は実際其日々々の仕事に追われていた。家へ帰ってからも気楽に使える時間は少しもなかった。其上彼は自分の読みたいものを読んだり、書きたい事を書いたり、考えたい問題を考えたりしたかった。それで彼の心は殆ど余裕というものを知らなかった。彼は始終机の前にこびり着いていた。

娯楽の場所へも滅多に足を踏み込めない位忙しがっている彼が、ある時友達から謡の稽古を勧められて、体よくそれを断ったが、彼は心のうちで、他人には何うしてそんな暇があるだろうと驚いた。そうして自分の時間に対する態度が、恰も守銭奴のそれに似通っている事には、丸で気がつかなかった。

自然の勢い彼は社交を避けなければならなかった。人間をも避けなければならなかった。彼の頭と活字との交渉が複雑になればなる程、人としての彼は孤独に陥らなければならなかった。彼は朧気にその淋しさを感ずる場合さえあった。けれども一方ではまた心の底に異様の熱塊があるという自信を持っていた。だから索寞たる曠野の方角へ向けて生活の路を歩いて行きながら、それが却って本来だとばかり心得ていた。温い人間の血を枯らしに行くのだとは決して思わなかった。

彼は親類から変人扱にされていた。然しそれは彼に取って大した苦痛にもならなかった。

『教育が違うんだから仕方がない』

彼の腹の中には常に斯ういう答弁があった。

『矢っ張り手前味噌よ』

是は何時でも細君の解釈であった。

気の毒な事に健三は斯うした細君の批評を超越する事が出来なかった。そう云われる度に気不味い顔をした。ある時は自分を理解しない細君を心から忌々しく思った。ある時は叱り付けた。又ある時は頭ごなしに遣り込めた。すると彼の癇癪が細君の耳に空威張をする人の言葉のように響いた。細君は『手前味噌』の四字を『大風呂敷』の四字に訂正するに過ぎなかった。

彼には一人の腹違いの姉と一人の兄があるぎりであった。親類と云った所で此二軒より外に持たない彼は、不幸にして其二軒ともあまり親しく往来をしていなかった。自分の姉や兄と疎遠になるという変な事実は、彼に取っても余り気持の好いものではなかった。然し親類づきあいよりも自分の仕事の方が彼には大事に見えた。それから東京へ帰って以後既に三四回彼等と顔を合せたという記憶も、彼には多少の言訳になった。もし帽子を被らない男が突然彼の行手

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.